

## 第四章 玉鬘の物語 玉鬘の姫君たちの物語

[第一段 正月、男踏歌、冷泉院に回る]

その年かへりて(年が改まって)、\*男踏歌せられけり(男踏歌が行なわれました)。 \*注に<正月十四日、宮中で行われる。女踏歌は毎年行われたが、男踏歌は隔年または数年間を置いて行われた。>とある。また、「風俗博物館」サイトの「六条院四季の移ろい」トピックの「睦月」ページの「踏歌節会(たふかのせちゑ)」ヘッドに分かり易い説明がある。抜粋参照しようと思ったが、此処の話を読む為の下知識としては全文引用して、此処に参照文として置いておきたい。即ち、《踏歌を奏する行事。踏歌は、多人数で足を踏みならして拍子をとって歌うもの。男踏歌(おとことうか)と女踏歌(おんなとうか)に分かれ、男踏歌は正月十四日に、女踏歌は十六日に行われる。中国から渡来した風習であるが、日本古来の歌垣(うたがき)(男女が集まって歌い舞うこと)と結びついたものと考えられている。正月にあたり、満月前後の夜に大地の精霊を鎮めるもので、聖武天皇の頃には宮廷行事として行われていた。歌曲の終わりに「万年阿良礼」と称するので「阿良礼走(あらればしり)」ともいう。『西宮記』等によれば、十四日の男踏歌は清涼殿(せいりょうでん)に天皇が出御し、舞人・歌人が楽を奏しつつ東庭に列立し、踏歌を行い、御前で祝詞(のりと)を奏上する。その後内侍(ないし)が歌人に綿を被(かづ)け、歌人は催馬楽(さいばら)の「竹河」という曲を歌う。それがすむと舞人・歌人は市中に出、京の各所で踏歌を行い、諸所に設けられた「水駅(みずうまや)」で飲食をして休息をとった。そして明け方に再び宮中に戻り、酒饌を賜り、管絃が行われて天皇より禄(ろく)を賜った。『源氏物語』「初音」の巻に、「今年は男踏歌あり。内裏(だいり)より朱雀院(すざくいん)に参りて、次にこの院に参る。道の程遠くて、夜明け方になりけり」とある。十六日の女踏歌は数十人の舞妓が紫宸殿(ししんでん)の南庭で踏歌をする。これは宮中でのみ行われるもので、市中へは出ず、したがって「水駅」も設けられない。男踏歌は平安中期、円融天皇の時代に絶えてしまったので、以降、「踏歌」といえば女踏歌をさすことになった。現在では正月十一日、熱田神宮で「踏歌神事」が行われている。》とある。有難いことに、熱田神宮の踏歌神事はユー・チューブにアップされていて、しかも投稿者の「なべさんの中国情報」というヤフー・ブログに詳しい説明まであって、舞人の武官姿に当時の男踏歌の一端が偲ばれる気もする。投稿者本人の趣味ではあるだろうが、私には奇特だ。尤も、当時の門付けの華であっただろう妙齡の舞人が其処に在ることの寿ぎは、別の投稿者のユー・チューブ動画にあった住吉大社踏歌神事の女踏歌の方に実感できたが、勿論、熱田神宮の神職たちの努力には無条件に敬意を表したい。

殿上の若人どもの中に(幹部役人の貴公子たちの中に)、物の上手多かるころほひなり(歌舞の上手な者が多くいるという当節です)。その中にも、すぐれたるを選らせたまひて(朝廷はその中でも優れた者を男踏歌の演者にお選びあそばして)、この四位の侍従、\*右の歌頭なり(この四位の源侍従が右隊の音頭取りになりました)。かの蔵人少将、楽人の数のうちにありけり(かの源蔵人君は楽人に含まれていました)。 \*「みぎのかとう」は<右方の音頭取り>という言い方なのだろう。が、男踏歌の演目は催馬楽の歌舞などに決まっているようなので、舞楽の様式で「左方唐楽(さほうたうがく)・右方高麗楽(うほうこまがく)」とされるものの「右方」を意味するものではなく、とは言え何でも競わせたので、第一左隊と第二右隊とを仕立てた、その右隊の隊長あたりかと思当する。が、良く分からないのに、注は無い。

十四日の月のはなやかに曇りなきに(十四日の満月が明るく曇りなき夜に)、\*御前より出でて(男踏歌一行は御所から出て)、冷泉院に参る(冷泉院に参ります)。女御も(古妃の女御も)、\*この御息所も(この身重の新妃も)、\*上に御局して見たまふ(寝殿に御座所を設けて見物なさいます)。 \*「おまへよりいでて」は注に<踏歌のコースは宮中の清涼殿東庭から、院、中宮、春宮の順に回り、暁に

宮中に帰って来る。>とある。 \*「この御息所も」は注に<大君をいう。御子出産の妃をいう呼称。まだ御子は誕生していない。四月に女宮が生まれる。>とある。「みやすんどころ」が<宮の母上>を言うなら、弘徽殿女御も御息所かと思うが、この人はずっと「女御」と呼称されている。分かり難い語用だが、当時の読者には普通の語用なのだろうか。その感性も分からない。 \*「うへにみつぼねして」は注に<冷泉院御所の寝殿の一角に部屋を設けての意。>とある。

上達部、親王たち、ひき連れて参りたまふ(踏歌隊一行は高官や親王たちを引き連れて門付け申し上げなさいますが、)。右の大殿(源右大臣一家と)、\*致仕の大殿の族を離れて(藤大納言一家以外には)、きらきらしうきよげなる人はなき世なりと見ゆ(華やかで見事な人はいない当節に思われます)。 \*「ちじのおほとものぞう」は<故藤原左家一族>なので「藤大納言一家」なのだろう。

内裏の御前よりも(御所での御前踏舞での女たちの目よりも)、この院をばいと恥づかしく(この冷泉院での女たちの目をとても気恥づかしく)、ことに思ひきこえて(特に意識し申し上げて)、皆人用意を加ふる中にも(踏歌隊一行は皆が藤姫に結婚を申し込んでいらっしやった人たちだったので、装束を整い直す中でも)、蔵人少将は(源蔵人君は)、見たまふらむかしと思ひやりて(新妃が踏歌を御覧になるに違いないと思ひ遣って)、静心なし(落ち着きません)。

匂ひもなく見苦しき\*綿花も(地味で見映えしない綿飾りも)、かざす人がらに見分かれて(付ける貴公子たちの目印になって)、様も声も(舞人の姿も楽人の声も)、いとをかしくぞありける(とても風情有りました)。 \*「わたばな」は、初音巻三章一段の男踏歌の場面では「挿頭の綿(かざしのわた)」と語られていた<冠に付けた綿飾り>のことらしい。古語辞典には<真綿で作った造花。>とあるので、防寒用の耳当てではないのかも知れない。

「\*竹河」謡ひて(踏歌一行は恒例の竹河を謡って)、御階のもとに踏みよるほど(接待に与るべく、寝殿の御階の下に踏み寄ると)、過ぎにし夜のはかなかりし遊びも思ひ出でられければ(源蔵人君は一月の花見の過ぎた夜の一時の演奏も思い出されては)、ひがこともしつべくて涙ぐみけり(感情の高まりに理性も失いそうで涙ぐむのでした)。 \*「竹河」は春歌らしく、恐らくは子孫繁栄を願う祝い歌に役割認識されて、踏歌に組み込まれたのだろう。二章四段に源侍従の訪問で玉鬘邸が俄かに梅の花見と化した一幕で、君達が縁側で竹河を歌ったら、御簾内から酒や被け物が出された、という場面があって、その所作が男踏歌を迎える高家側の作法だったことに洒落た戯れ事だという、風情のある演出になっていた。此処は正にその一月の花見を踏まえた場面のようなのだ。

\*後の宮の御方に参れば(一行は引き続いて、院内の秋好中宮の御座所に参上したので)、上もそなたに渡らせたまひて御覧ず(院もそちらに移りなさって踏歌を御覧になります)。 \*「きさいのみやおおんかた」は注に<秋好中宮の御殿。冷泉院の中の御殿。>とある。対屋ではなく、別棟の寝殿なのだろうか。分からないので明示しない。

月は、夜深くなるままに(月は夜が更けるほど)、昼よりもはしたなう澄み上りて(昼より明るく見え過ぎて困るほど澄んで高く上がり)、いかに見たまふらむとのみおぼゆれば(蔵人君は新妃が如何思っ見ていらっしやるかとばかり気になって)、踏む空もなうただよひありきて(行く先

も分からぬままに漂い歩いて)、盃も(酒の進み具合も)、さして一人をのみとがめらるるは(自分一人だけが名指しされて飲んでいないと責められるのは)、面目なくなむ(面目ないのでした)。

[第二段 翌日、冷泉院、薫を召す]

夜一夜(夜中いっぱい)、所々かきありきて(各所を全て歩き回って)、いと悩ましく苦しくて臥したるに(御所へ帰り着くと、とても疲れて休もうと横になっていたところに)、源侍従を(源侍従をと)、院より召したれば(冷泉院から御呼び出しがあったので)、「あな、苦し(ああ辛い)。しばし休むべきに(少し休みたいのに)」とむつかりながら参りたまへり(と愚図りながら参上なさいました)。

御前のことどもなど問はせたまふ(院は御所での踏歌節会の様子などをお聞きなさいます)。

「歌頭は、うち過ぐしたる人のさきざきするわざを(歌頭は年長者が前々から勤めた役なのに)、選ばれたるほど、心にくかりけり(選ばれたとは感心だ)」とて(と冷泉院は)、うつくしと思しためり(源侍従を自慢にお思いのようです)。

「\*万春楽」を御口ずさみにしたまひつつ(院は上機嫌で万春楽と口ずさみなさりながら)、御息所の御方に渡らせたまへば(身重で大儀な新妃の御部屋にお移りなさるので)、御供に参りたまふ(源侍従もお供について参りなさいます)。 \*「ばんすらく」は<平安時代、踏歌(とうか)に用いた囃子詞(はやしことば)の一。七言八句の漢詩の各句の末に唱えたもので、また、その歌曲全体をもいう。男踏歌用。ばんしゅんらく。ばんずんらく。>と大辞泉にある。囃子詞だから「ばんすらく」を<上出来だ>という意味で何度も口にした、ということなのだろう。

物見に参りたる里人多くて(前夜の踏歌を見物に来ていた実家の女房たちが御部屋には多く居て)、例よりははなやかに(いつもより華やいで)、けはひ今めかし(活気があります)。渡殿の戸口にしばしみて(源侍従は戸口前の縁側に少し腰を下ろして)、声聞き知りたる人に(聞き覚えのある声の御簾内の女房と)、ものなどのたまふ(言葉を交わします)。

「一夜の月影は(昨夜の月明かりは)、はしたなかりしわざかな(弥気に明るかったなあ)。蔵人少将の、月の光にかかやきたりしけしきも(蔵人君が月の光に照れていた様子も)、\*桂の影に恥づるにはあらずやありけむ(あんなに恥づかしがることもなかったろうに)。\*雲の上近くては(御所では)、さしも見えざりき(それほどでもなかったのに)」 \*「かつら」は此処では<中国の伝説で、月の世界にあるという木。>の意らしく、「桂の影」は<月光>を風流に言い換えたものらしく、正に風流な言い回しにするために持ち出した語で、文意上は「月の光に」と重複するので煩雑さを避けて省かれるべきものなので、必要と思われる主語や述語対象が不当に省かれている印象のある古文ないし女房語りに於いて、この語用はものを言う時の価値観なり、何が重要視されていたのかなりが窺える一つの例かも知れない。「恥づるにはあらず」は<恥づかしがることは無い>。「やありけむ」は<～であっただろうか、～ではなかったかも知れない>。 \*「雲の上近く」は注に<宮中をさす。>とある。

など語りたまへば(などと話しなされると)、人びとあはれと(女房たちは蔵人君の気持を押し量って印象深く)、聞くもあり(聞く者も居ました)。

「\*闇はあやなきを(暗がりでは香りだけでも)、月映えは今すこし心異なり(月映えはいつそう素晴らしい)、と定めきこえし(とみんな言っていますよ)」などすかして(などと相手の女房はからかい半分に源侍従をおだてて)、内より(奥の女房からは)、\*「闇はあやなきを」は注に<以下「定めきこえし」まで、女房の詞。『源氏積』は「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくる」(古今集春上、四一、凡河内躬恒)を指摘。>とある。源侍従の香り高さを前提とした言い回しらしく、「闇はあやなきを」は<夜の闇では分かり難い>という意味ではなく、暗闇では<香りが立っていたが>という言い方で、だから「今すこし」は他者との比較ではなく、香りだけでなく源侍従は姿が見えれば尚更素晴らしい、というベタな褒め言葉で、既にそれは定評だったから逆に気楽に言えた、聞けた、みたいな場面。

「竹河のその夜のことは思ひ出づや、しのぶばかりの節はなけれど」(和歌 44-23)

「しのぶばかりの一節も、無くて裏召し竹河の夜」(意識 44-23)

\*注に<女房から薫への贈歌。「夜」と「世」の掛詞。「竹」と「よ(節と節の間)」と「節」は縁語。>とある。「しのだけ(篠竹)」は<根笹の仲間の総称。細くて、群がって生える竹。篠(しの)。篠笹。>と大辞泉にある。篠笹に使うらしい。で、この「しのぶ」の洒落語用がこの歌の発想と味わいの全てらしく、であれば大喜利もので、言い換えが成立しない歌、ではありそうだ。並び替えでお茶を濁す。にしても、「しのぶばかりの節」とは如何にも思わせぶりな艶っぽい、しかし実のない商売女風の、王朝風に言えば召し人めいた詠みっぷりだ。二章二段の去年の年始で源侍従が玉鬘邸を訪れた際に「宰相の君と聞こゆる上臈」が、「折りて見ばいと匂ひもまさるやとすこし色めけ梅の初花」(和歌 44-01)と気取っていた侍従君をからかっていたが、同人物のような感じを受ける。

と言ふ(と一句あります)。はかなきことなれど(ほんの座興の思い出だったが)、涙ぐまるるも(それだけに去年の年始や花見の懐かしさに、涙ぐまれて来るのも)、「げに(そうか)、いと浅くはおぼえぬことなりけり(こんなに印象深かったのか)」と(と源侍従は)、みづから思ひ知らる(我ながら藤姫への思いが浅くなかった事を思い知るのです)。

「流れての頼めむなしき竹河に、世は憂きものと思ひ知りなき」(和歌 44-24)

「竹河に 浮いて流れて 消えた節」(意識 44-24)

\*注に<薫の返歌。「竹河」の語句を用いて返す。「竹」と「よ(節と節の間)」と「節」は縁語。>とある。そうか、「竹」にも「川」にもそれぞれ縁語は多いし、「竹河」は催馬楽の題名であり、地名であり、川名であり、元々この題目は捻り甲斐が多そうだ。

ものあはれなるけしきを(そう詠み返して感じ入っているような源侍従の姿を)、人びとをかしがる(女房たちは風流に思います)。さるは(そうは言っても侍従君は)、おり立ちて人のやうにもわびたまはざりしかど(殊更に蔵人君のように思いつめていらっしやなかったが)、人さまのさすがに心苦しく見ゆるなり(憂いのあるこの人の印象から同情を誘うのです)。

「うち出で過ぐすこともこそはべれ(おしゃべりが過ぎました)。あな、かしこ(では失礼)」

とて、立つほどに(と言って源侍従が帰ろうとした時に)、「こなたに(中に入るように)」と召し出づれば(と院からのお呼び入れがあったので)、はしたなき心地すれど(妊妃に近付き申すのは気後れにも思ったが)、参りたまふ(侍従君は御簾内にお入り申しなさいます)。

「故六条院の、踏歌の朝に、女楽にて遊びせられける(故六条院が踏歌の朝に女楽で演奏会をなさったのを)、いとおもしろかりきと、右の大臣の語られし(とても興味があつたと右大臣が語っていなさいました)。何ごとも、かのわたりのさしつぎなるべき人、難くなりける世なりや(およそあれほどの風流を継いでいるような人は見受けられない昨今ですね)。いと物の上手なる女さへ多く集まりて(さぞ楽器の上手な女たちが集まって)、いかにはかなきことも(ちょっとした演奏会でも)、をかしかりけむ(情緒があつたことだろう)」

など思しやりて(などと冷泉院はその真似事でもなさろうと)、御琴ども調べさせたまひて(弦楽器類を女房たちに調律させ為さつて)、箏は御息所(十三弦を妊妃に)、琵琶は侍従に賜ふ(琵琶を侍従君に弾かせなさいます)。和琴を弾かせたまひて(院御自身は六弦和琴をお弾きあそばして)、「\*この殿」など遊びたまふ(「この殿」などを演奏なさいます)。 \*「この殿」は催馬楽の「この殿は」なのだろう。二章二段で蔵人君が謡っていた祝い歌。

御息所の御琴の音(妊妃の御琴の音は)、まだ片なりなるところありしを(まだ未熟な所もあつたのを)、いとよう教へないたてまつりたまひてけり(院はとてもよく教え為し差し上げなさいました)。今めかしう爪音よくて(華やかに爪音が鳴つて)、歌(歌物や)、曲のものなど(演奏だけのものなど)、上手にいとよく弾きたまふ(上手に良く心得てお弾きになります)。何ごとも心もとなく後れたることはものしたまはぬ\*人なめり(どんなことにも不勉強だったり苦手だったりすることが無くいらっしゃる人のようです)。 \*「人なめり」の推量は源侍従目線での語り口らしい。つまり、この文はほぼ、妊妃の琴を聞きながら思う侍従君の心中文のようだ。

容貌、はた(姿形もまた)、いとをかしかべしと(さぞ素晴らしいのだろうと)、なほ心とまる(源侍従は更に興味が湧きます)。かやうなる折多かれど(このような機会は多かつたが)、おのづから気遠からず(普通に余所余所しくなく)、乱れたまふ方なく(寛ぐほどでもなく)、なれなれしうなどは怨みかけねど(馴れ馴れしくは振られた恨み言を口にはしないが)、折々につけて(折に触れて)、思ふ心の違へる嘆かしさをかすむるも(侍従君は藤姫への恋が適わなかつた嘆きを滲ませてみるものの)、いかが思しけむ(妊妃が如何お思いかは)、\*知らずかし(分からなかつたのです)。\*「知らずかし」は今までに無い結びの語り口で語感が掴み難いが、此処の文は基本的には源侍従の目線で語られている、とは読めるのだろう。だから、そういう文意のまま「かし」を「ありける」の強調口調と見做して置く。

### [第三段 四月、大君に女宮誕生]

卯月に女宮生まれたまひぬ(四月に女宮がお生まれになりました)。 \*注に<御息所、女宮を出産。冷泉院の御子は弘徽殿女御の生んだ女一の宮がいるのみ。したがって、女二の宮の誕生となる。>とある。女二の宮1歳、御息所20歳、ということは分かるが、他の登場人物の年齢を如何見るかは、どうも私の見方は一般的な解釈とは違うらしい。が、一先ずは私なりの解釈で概観して置く。玉鬘52歳、冷泉院48歳、秋好中宮57歳、弘徽殿

女御 49 歳、今上帝 40 歳、明石中宮 38 歳、春宮 26 歳、また源右大臣 45 歳、藤大納言 50 歳、そして源侍従 19 歳、といったところだ。

ことにけぎやかなるもの\*栄もなきやうなれど(退下なさった帝なので、特に盛大な儀式めいた祝い行事もないようだが)、\*院の御けしきに従ひて(院の御喜びに呼応して)、右の大殿よりはじめて(右大臣源殿を初めとして)、\*御産養したまふ所々多かり(私的にお七夜祝いの祝い物を奉る高家が多くありました)。\*「栄(はえ)」は<引き立つこと。榮譽。>などの抽象概念で、具体的な事物を言っているのではないらしい。ただ、「栄もなし」は<退下した帝だから自前の公式行事が無い>という実際の事情を言っているようでもあり、「ことにけぎやかなるもの」は具象の<盛大な儀式>を言っているようでもある。他の読み方も思い付かないので、一応そう読んで置く。\*「院の御けしきに従ひて」は注に<院が喜ぶ気持ちによって、それを無視できない。>とある。「従ふ」は此处では<気持ちに答える=呼応する>くらいか。ところで、元来の祝いは様式よりは共感だろうから、むしろ是は本義に適っているようにも見える。が、様式こそが集団の組織統制認識の象徴であってみれば、帝は祝される役割を担っているのであり、個人の意向で祝福されるのではない。上皇の隠然たる政治力なるものは、上皇自身の統制力などではなく、担ぐ有力家が彼に何処まで利用価値を認めているかに掛かっており、冷泉院はその限りに於いて、帝のよき助言者だったのだろう。尤も、帝の権威も二代目以降は自身の統率力で維持するものではなく、有力者間の調整能力や有力者との交渉力に負うので、力の源泉は院も帝も実業者の経済力頼みである事は同じだが、帝が表立った公式行事で国体を示すのに対して、院は形式上では私的儀式によって王制を補完する。\*「産養(うぶやしなひ)」は<出産後 3 日・5 日・7 日・9 日目の夜に、親類が産婦や赤子の衣服、飲食物などを贈って祝宴を開くこと。また、その贈り物。平安時代、貴族の家で盛んに行われた。現在の「お七夜の祝い」はこの名残。>と大辞泉にある。

\*尚侍の君(玉鬘殿が)、つと抱き持ちてうつくしみたまふに(女宮を抱いて離さず可愛がりなさるが)、疾う参りたまふべきよしのみあれば(冷泉院から早く参院なさるべしとばかり仰せがあるので)、\*五十日のほどに参りたまひぬ(生後五十日のお食初めの頃に母君の御息所は女宮を伴って参院なさいました)。\*「かんのきみ」と此处で呼称する意図ないし意味ないし感性が分からない。玉鬘殿の主収入は何なのか。基本的には故藤原右家殿の遺産が基で、息子たちや一族縁者からの援助や口利き依頼の貢物なども其也にあった、くらいに見ているが、どういう生活基盤なのだろう。少なくとも、冷泉院の庇護下にあるとも思えず、まして此处では、母君となった姫が出産で里帰りしている実家の女宮の祖母上という立場での登場であり、その人を「尚侍」と呼ぶ説得力は無いのではないか。\*「五十日(いか)」は「五十日の祝(いかのいわひ)」が<子供が生まれて 50 日目に行った祝い。父や外祖父などが箸を取って、赤子の口に餅(もち)を含ませる。平安時代に、主として貴族の間で行われた。いか。>と大辞泉にある。注には<生後五十日のお食初めの祝いがある。>とある。

女一の宮、一所おはしますに(女一の宮が冷泉院には一人いらっしやったが)、いとめづらしくうつくしうておはすれば(この皇女はとても目新しく可愛らしくていらっしやるので)、\*いとみじう思したり(院はそれは非常に嬉しくお思いになりました)。\*「いとみじう思したり」は注に<はなはだ嬉しい気持ち。>とある。「いみじ」は良くも悪くも<程度が甚だしい>という言い方で、良い場合は<大変素晴らしい、とても嬉しい>などとなり、悪い場合は<大変残念だ、とても悲しい>などとなるようだ。此处では<とても嬉しい>は妥当に思える。

いとただこなたにのみおはします(院はますますこの女宮と母君の御息所の御部屋にばかりいらっしやいます)。女御方の人びと(女御方の女房たちは)、「いとかからでありぬべき世かな(本

当にこうであって欲しくないものです」と、ただならず言ひ思へり(と心穏やかならず言っでは思うのでした)。

正身の御心どもは(女御と御息所は御本人同士の御気持には)、ことに軽々しく背きたまふにはあらねど(何か短絡的に反目申しなさることもなかったが)、さぶらふ人びとの中に(仕える女房たちの中に)、くせぐせしきことも出で来などしつつ(意地悪な対応をすることも出て来たりして)、かの中將の君の(兄君の中將が)、さいへど人の\*このかみにて(やはり年長者だけのことはあって)、のたまひしことかなひて(仰っていた事が当たってしまい)、 \*「このかみ」はく兄、長男>その者を示す言い方でもあるが、広く<年長者>という言い方もあるようだ。「人のこのかみにて」は<人に長じただけのことはあって=年の功で=年長者の知恵で>あたり。

尚侍の君も(玉鬘殿も)、「むげにかく言ひ言ひの果ていかならむ(無闇にこうして言い争って行ったのでは如何なって仕舞うのだろう)。人笑へに(妃同士の仲違いは物笑いの種として)、はしたなうもやもてなされむ(見っともなく噂立てられるのだろう)。上の御心ばへは浅からねど(院の御寵愛は深い)、年経てさぶらひたまふ御方々(長年仕えていらっしゃった御妃方が)、よろしからず思ひ放ちたまはば(この人を不快だとお見捨てなさったら)、苦しくもあるべきかな(辛い立場になるだろう)」と思ほすに(とお考えになっていたところに)、

内裏には(帝におかせられては)、まことにものしと思しつつ(藤姫の参院を本当に面白く無く御思いで)、たびたび御けしきありと(たびたび御不満をお漏らしになると)、人の告げ聞こゆれば(中將などが知らせ聞かせるので)、わづらはしくて(玉鬘殿は困って)、中の姫君を(次女の姫君を)、\*公さまにて交じらはせたてまつらむことを思して(公職の女官勤めとして帝にお仕え申し上げさせる事をお考えになって)、\*尚侍を譲りたまふ(次女姫に尚侍の職を譲りなさることを考えます)。 \*「公さまにて交じらはせたてまつらむ」は、後宮での私的な帝への奉仕、ではなく、御所での公的な帝への奉仕、のような言い方に見える。が、分からないのはその地位の実質での意味やそういう形で宮仕えすることになる事情などの、玉鬘がそう考えるに至る背景だ。それが見えないと文意が分からない。で多分、太政大臣の家格でも肝心の大臣が故人では、とても後宮の御部屋体制を維持する経済力も政治力も無く、姫を何処かの良家に養女に出して、先方の家格で入内させて貰うしかないのに、養女は良いとしても、先方に自前の姫が居れば、養女を入内させることはないだろうし、つまりは良縁が無かったのだろう。で、女官なら家格は必要でも、御部屋体制は不要で、個人として宮仕えできる、という建前になっていたと仮定する。が、それでも、内侍の一女官として仕えるなら良いとしても、司の長官となると、もうそれは政治人事だろうし、まして尚侍は実質で帝妃だったように何処かで説明されていたと思うし、となれば家格ばかりか家の実力も問われたように思えてならない。で結局、私には事情も実情も経緯も全く分からないので、字面を追うしかない。 \*「尚侍を譲りたまふ」は<尚侍の地位を娘に譲り渡す>ということだろうか。だとすると、玉鬘自身に人事権は無いので、そういう希望を帝に願い申し上げる、という意味ではあるのだろう。そして、その願いは聞き届けられたように読めるが、その後の話は以下に語られるのだから、その心算で読み進もうとは思ふ。が、その前に、そうであるなら、玉鬘は今なお現職の尚侍だということになるのであり、そのこと自体にこそ私は当惑する。注にも此処の文意は<玉鬘は中君を一般の女官として帝に出仕させるべく、自らの尚侍の官職を譲ることを申し出る。>とある。私は本当に、本当に驚いた。玉鬘殿は今現在、現職の「尚侍の君」だったのか。それで、この帖に於いても是まで何度も「かんのきみ」と呼称されていたのか。いやしかし、玉鬘が尚侍に就任したのは23歳の11月のことだ(真木柱卷一章三段)。私の計算では現在で玉鬘52歳なので、約30年前のこととなり、つまり30年間在任していることになる。五年くらい短目に見ても在任

25年だ。しかも、任命されたのは冷泉帝代で、代替わりは冷泉帝 28歳の年(若菜下巻二章一段)で玉鬘は当時 32歳だった筈だから、其処から数えても 20年くらい経っている。いや、役所行政は政局からは独立した予算執行によって運営されるので、代替わりによって直ちに解任される訳ではないだろう。それでも予算編成権も人事権も朝廷にあるので、所定の任命期間が過ぎれば新帝によって役職者は更改されて行くだろう。ただ、そういう行政の独立性も一般の役所についてのもので、尚侍のように特に帝と個人的な信頼関係にある後宮司の役職は、代替わりを受けて辞任するもの、と私は思い込んでいた。仮に時の尚侍が王家筋の名誉職であったり、例えば花散里のような有職故実の権威だったりして、解任に相当しない場合があったとして、玉鬘がそれに該当するとも思えない。役所としての「内侍司(ないしのつかさ)」はく律令制で、後宮十二司の一。天皇の日常生活に奉仕した。勅や奏の取り次ぎも行うことから奈良末期以降急速にその地位が高まり、平安中期に後宮諸司が廃絶していく中、後宮を代表する官司となった。(大辞林)とある令制で制度化された行政組織ではあるようだが、実質は帝の家政機関だろうから、他を律するための制度を自らに堅苦しく運用する意味など体裁でしか無く、御所とはいえ後宮という私的空間に於いて体裁を付ける必要も無く、実務は柔軟に、というより帝の個人的な生活様式に合わせて奉仕する以外には無いだろう。尤も帝は公人なので、公務を定められた様式に則って行なう、という面は当然にあるだろうし、その際の細かい所作を秘書が気遣い補うということもあるだろう。が、まさか式典自体を内侍が主導する筈もなく、いや中務が式典管理をしようと、様式継承の精神性と、その支柱としての役割を担う自負は帝王学によって帝自身に備わるべきものであって、確かに東宮教育が女官に担われる部分が多いとしても、内侍司や尚侍に実権がある筈がない。抛って、期間の長さも然り乍ら、玉鬘の尚侍在任の意味が、私にはどうにも分からない。とは言え、本文こそが真なのであって、解釈は其処に符合させてこそ説得力があるのだから、実態実情を見ようとする姿勢からしても、玉鬘は今現在で名目上は「尚侍」だったのだ、と見て置く他は無さそうだ。

\*朝廷(おほやけ、帝は玉鬘殿の尚侍辞任を)、いと難うしたまふことなりければ(お許しなさらなかった)、年ごろ(この数年来)、かう思しおきてしかど(玉鬘殿は辞意を固めていらっしやりながら)、え辞したまはざりしを(引退出来ずにいらしたが)、\*故大臣の御心を思して(帝は玉鬘殿の申し出について、御伯父にあたる故右家大臣殿の筆頭家としての入内意向を尊重なさって)、\*久しうなりにける昔の例など引き出でて(遠い昔にあった尚侍の母子引継ぎ前例を踏襲するという体裁で)、そのことかなひたまひぬ(この願い出は叶ったのでございます)。\*この君の御宿世にて(この妹姫が尚侍を母上から譲り受ける御宿命だったので)、年ごろ申したまひしは難きなりけり(玉鬘殿の年来の退職願は聞き入れられなかった)、と見えたり(という巡り合わせになっていたように見えました)。\*「朝廷いと難うしたまふことなりければ」は注にく朝廷は尚侍辞任をそう簡単に許可しないのが普通なので、の意。>とある。確かに、そんな風な言い方に見えるし、人事権が絶対権限者の帝にある事は分かるが、辞任を認めない理由が分からない。実務に於いても、情に於いても、今上帝が玉鬘に固執する事情は何かあるのだろうか。いや、本文にこう書いてある以上は、そういう経緯だった、とは認識するが、説得力のある事情説明は欲しい所だ。\*「故大臣の御心を思して」は注にく主語は帝。鬘黒が娘を入内させたいと奏上していたこと。>とある。帝にしては敬語が軽い気がするが、そう読めば文意は取り易いので従う。また、与謝野訳文はく御伯父であった大臣の功勞を思し召す御心から>としてあって、確かに今上帝の御母堂であった麗景殿女御と故右家殿は同腹兄妹だったという一つの説得力が示された気がして、是にも従う。が、にもかかわらず、「そのことかなひたまひぬ」の「かなひ」は自動詞「かなふ」の連用形なので、「たまふ」は行為者に対する敬語ではなく、事態説明の丁寧語のようで、全体が少し変な言い回しの文に見える。私が古文に不慣れな所為なのか、悪御達の癖なのか、元々此処で語られている事柄の、言い回しではなく内容自体に疑義を覚えている所為か、どうも素直に読み進めない。\*「久しうなりにける昔の例など引き出でて」は注にく『集成』は「尚侍を母娘譲任の史上の例は現存文献



の上に見出せない」と注す。>とある。が、此処にはこう書いてある。前例踏襲を持ち出すのは、異例の抜擢をするに当たって、周囲の批判を過去の実績によって封じ、以て円滑な事態推移を図る、という意図がある。是は保守政治の常套手段だが、その有効性は過去の実績がどれほど周囲に認識されているかに掛かっている。当時の読者には認識されていたらしい<実績>が今日では「見出せない」というのは、現代読者の私には拠り所の無い、実に頼りない厭な知らせだ。\*「この君の御宿世にて～」は注に<長年尚侍辞任を申し出ていたが、娘の中君が尚侍を譲り受けるべき宿縁にあつて、それまで願いが叶わなかったように思えたという意。語り手の推測判断。>とある。この事情説明の語りは、どうも私には言い訳がましい言い方に聞こえるが、是で当時の読者が納得したのなら、一つの有り得る話なのか、という気にもなる。

#### [第四段 玉鬘、夕霧へ手紙を贈る]

「\*かくて(これで次女姫も)、心やすくて内裏住みもしたまへかし(安心して宮仕えも出来なさるだろう)」と、思すにも(と玉鬘殿はお思いになるにも)、「いとほしう(我が子を案じて)、少将のことを(蔵人少将の事を)、母北の方のわざとのたまひしものを(母君の三条殿が殊更の取り成しをと私にご依頼なさっていたものを)。頼めきこえしやうにほのめかし聞こえしも(お任せ下さるやうにと内々に申し上げていた事を)、いかに思ひたまふらむ(反故にするようなことになるので、如何お思いになるだろうか)」と思し扱ふ(とお考えになります)。\*「かくて」は注に<「かくて」以下「したまへかし」まで、玉鬘の思い。「かくて」は地の文とも心中文とも読める。>とある。

弁の君して(そこで玉鬘殿は、同腹次兄の右中弁君を遣いに立てて)、心うつくしきやうに(今回の次女の尚侍就任を、決して蔵人君を避けての事ではなく、御意に他ならないと)、大臣に聞こえたまふ(父君の源殿に申し上げなさいませう)。

「内裏より、かかる仰せ言のあれば(帝からこのようなお話がありました)、\*さまざまに(色々ありましたので)、あながちなる交じらひの好みと(分不相応な宮仕えの高望みと)、世の聞き耳もいかがと思ひたまへてなむ(さぞ世間で悪く言われるだろうと存じられまして)、わづらひぬる(困っております)」\*「さまざまに」は「世の聞き耳もいかが」に掛かるようにも見えるが、下の源殿の回答から察するに、姉姫の不参などの今までの経緯と今回の妹姫の尚侍任命とを玉鬘は絡めて考えている、かのようにも思える。

と聞こえたまへば(という文面で)、

「内裏の御けしきは(帝が御内心で)、\*思しとがむるも(姉姫の不参をご不満に思っいらっしゃるのも)、ことわりになむ承る(無理からぬことと存じます)。公事につけても(更に今回は、公務の仰せにまで)、宮仕へしたまはぬは(入内なさらないとは)、さるまじきわざになむ(あつてはならぬことです)。はや、思し立つべきになむ(早くお受けなさるべきです)」\*「思しとがむる」は<ご不満でいらっしゃる>だろうが、何が話題なのか分かり難い。が、下に「公事につけても宮仕へしたまはぬは」とあり、今回の入内要請が前回の私的な打診とは違って公式の命令であることを話題にしていることから、「御けしき」が長女姫の不参に対する不満である事が推測される。多分に形式的なことかとは思いますが、やはり女御入内は実家負担による主体的参内で、私的な契約関係にあるので基本的には対等な立場で帝に対応できる地位であり、尚侍入内は公費負担による受動的参内で、雇用関係にあるので基本的には従属する立場に帝に奉仕する地位にある、とい

うことらしい。が、実際には帝の相手を務めることに違いは無いので、結局は個人的関係での対応になる。となれば、尚侍も実家筋から強力な支援があれば後宮に自勢力を持つ事が許されたのだろう。

と申したまへり(と源殿は応えなさいました)。

また(姉姫の参院に際して先に縁戚の女御にご挨拶なされたのと同じように)、このたびは(この度の妹姫の参内に際しては)、中宮の御けしき取りてぞ参りたまふ(先に後宮の明石中宮の御座所でご機嫌を伺ってから帝の御座所に参上なさいます)。「\*大臣おはせましかば(父君の大臣がご存命であれば)、おし消ちたまはざらまし(尚侍などという従者身分での参内で後宮の女御たちに引けをお取りになりなさることもなかつたろうに)」など、あはれなることどもをなむ(などと玉鬘殿はこうして所々に心配りして次女が虐められないように挨拶回りをしなければならない事情に、無念な感慨を覚えなさいます)。\*「おとどおはせましかば」は注に<玉鬘の心中。>とある。現代劇なら<お父さまが生きてらしたらねえ>みたいな言い方だろうか。何れ、こうして有力者に挨拶回りをしなければならない前太政大臣夫人の無念さ、ではあるのだろう。太政大臣家の興入れであれば、この時とばかりに誼を結ぼうと全公卿から盛大な祝い品が丁重な使者によって、大臣家の方に贈られたに違いない。

姉君は、容貌など名高う(姉君は美貌名高く)、をかしげなりと(風情もあると)、聞こしめしおきたりけるを(お聞きあそばしていらしたのが)、引き変へたまへるを(妹君の参内に代わってしまったのを)、なま心ゆかぬやうなれど(帝はご不満らしかったが)、\*これもいとらうらうじく(この妹君もとても洗練されていて)、心にくくもてなしてさぶらひたまふ(行き届いた対応ぶりで帝に奉仕なさいます)。\*「これもいとらうらうじく心にくくもてなして」は注に<中君をいう。才気あり奥ゆかしく振る舞う。>とある。で、「らうらうじ」だが、是は大辞林に<心配りがゆき届いている。心深くすぐれている。知性的である。>また<知性美を備えている。気高く美しい。洗練された美しさがある。>とあって、前に「今一所は、薄紅梅に桜色にて柳の糸のやうにたをたとたゆみ、いとそびやかになまめかしう澄みたるさまして、重りかに心深きけはひは(姉君が)まさりたまへれど、匂ひやかなるけはひはこよなしとぞ人思へる」(二章五段)と語られた特徴と符合する。また、「心にくくもてなして」は床所作に聞こえる。

#### [第五段 玉鬘、出家を断念]

\*前の尚侍の君、容貌を変へてむと思し立つを(玉鬘殿は出家しようと決意なさるが)、\*「さきのかんのきみ」は注に<玉鬘出家を決意。尚侍の職を中君に譲ったので、「前の尚侍の君」と呼称される。>とある。私の予想では、この呼称は今回限りになると思うが、どうだろうか。それと、何というか、話題が飛躍し過ぎる。というか、入内の話はずいぶんあっさり済ませたものだと思うが、それはそれで一段落して、此处で場面転換するのなら、普通は季節柄の話なり、是が入内直後の話にしても其也の時間経過なり、何か全体の空気感が示されて然るべきに思うが、脱稿が無いとしたら、作者に変な焦りでもあるのか、分かり難い話運びだ。

「\*かたがたに扱ひきこえたまふほどに(嫁入りなされた姫君方を御世話申していらっしゃるのだから)、行なひも心あわたたしうこそ思されめ(仏道勤行までもなさろうというのは気忙しくお思いになるでしょう)。今すこし(もう少し)、いづ方も心のどこかに見たてまつりなしたまひて(どちらの御方も落ち着いたと見做し申し上げなされてから)、もどかしきところなく(思う存分に)、ひたみちに勤めたまへ(仏道勤行に打ち込みなさいませ)」 \*「かたがたに～」は注に<以下「勤めたま

へ」まで、「君たち」左中将・右中弁らの詞。「方々に」は大君・中君をさす。>とある。「扱ひきこえたまふ」様子が殆んど語られていないままの唐突感のある語用で、脱稿が無いとしたら、分かり難い語り口だ。尤も、実は是は息子たちが玉鬘の出家を思い留まらせる為の方便で、「扱ひきこえたまふ」ことが難しいという事情があることが下に語られていて、それが故に玉鬘は出家を考えた、という話のようで、「前の尚侍の君、容貌を変へてむと思し立つを」という書き出しは、作者が敢えて唐突感を狙った言い方なのかも知れない。が、そうであるなら、この演出は失敗している。いくら当時の人は感性が違うと言っても、あまりにも事情や経緯が説明不足で、むしろ心象演出を作為するなら、より周到に背景を語って、玉鬘の秘めた思いを浮かび上がらせるべきであり、今さら私が何を思い言ったところで如何なるものでもないが、稚拙だ。

と、君たちの申したまへば(と子息の君たちが申しなさるので)、思しとどこほりて(出家は思い留まりなさって)、\*内裏には、時々忍びて参りたまふ折もあり(御所の尚侍の所には時々目立たぬように参上なさる時もありましたが)、院には(冷泉院の御息所の所には)、\*わづらはしき御心ばへのなほ絶えねば(院が玉鬘殿に煩わしい御気持を未だお持ちなので)、さるべき折も(何か御用のある時でも)、さらに参りたまはず(一切参上なさいません)。\*「うちには」の「は」は対象限定の係助詞で述語には構文としてくしかし他方>と下に別対象について言及する意が含まれる。注にもく「院には」云々と並列構文。>とある。\*「わづらはしき御心ばへ」は注にく冷泉院の玉鬘への執心が未だに絶えない。>とある。私見ながら、因みに冷泉院 48 歳、玉鬘殿 52 歳、弘徽殿女御 49 歳、御息所 20 歳、今上帝 40 歳、明石中宮 38 歳、尚侍 19 歳、また左近中将 29 歳、右中弁 28 歳。

「いにしへを思ひ出でしが(昔のことを思い出してみたところが)、さすがに(仕方の無いこととは言いながら)、かたじけなうおぼえしかしこまりに(尚侍参内をわずか数日で退去申し上げた御無礼を、相済まなく思ってきたお詫びに)、人の皆許さぬことに思へりしをも(誰も同意していない事を承知の上で)、知らず顔に思ひて参らせたまつりて(敢えて無視して姉君を冷泉院に参院させ申し上げて)、みづからさへ(自分までが)、戯れにても(冗談にしても)、若々しきことの世に聞こえたらむこそ(院との色恋沙汰を噂されるとしたら)、いとまばゆく見苦しかるべけれ(本当に恥ずかしく見っともないことだ)」

と思せど(と玉鬘殿はお思いになるが)、さる罪によりと(その罪深さから、口外が憚られて)、はた(とても)、御息所にも明かしきこえたまはねば(娘の御息所にも打ち明け申し上げられなさらないので)、

「われを(私のことは)、昔より、故大臣は取り分きて思しかしづき(昔から亡きお父様は特に可愛がり下さり)、尚侍の君は(お母様は)、若君を(妹君を)、桜の争ひ(桜の争いや)、はかなき折にも(その他の事でも)、心寄せたまひし名残に(味方なさった鼻肩目のままに)、思し落としけるよ(私を見下げなさるのだ)」と、恨めしう思ひきこえたまひけり(と姉君は玉鬘殿を恨めしく思い申しなさったのです)。

院の上(冷泉院は玉鬘殿の不参を)、はた(相変わらずの御好意から)、\*ましていみじうつらしとぞ思しのたまはせける(縁談話で一時はしげく文交わしなただけに、余計にととても寂しいと思ひ仰っていました)。\*「まして」は何との比較なのか分からない。「はた」は御息所とは違う事情である事を示していると思うので、であれば話題はく相変わらずの好意>かと思われ、一応その線の文意で解釈して置く。

「\*古めかしきあたりにさし放ちて(当代の御所に比べれば当院は、古めかしい所だと敬遠して)。思ひ落とさるるも(見下されるのも)、ことわりなり(当然だ)」 \*「古めかしきあたりにさし放ちて」は注に<以下「ことわりなり」まで、冷泉院の御息所への詞。『集成』は「はなやかな宮中には時々参内して、と裏に皮肉をこめる」と注す。>とある。「古めかし」は必ずしも個別比較ではなく、一般的な時代認識での価値基準に照らしての言い方も有り得るだろうが、「思ひ落とす」と重ねての比較認識があるので、やはり強く御所を意識しての言い方かと思い、左様補語する。

と(と冷泉院は)、うち語らひたまひて(御息所とお話し合いなさって)、あはれにのみ\*思しまさる(深く抱き寄せて御息所をいっそう愛しなさいます)。 \*「思しまさる」は<ますますお思いになる>だが、こう言った後に「男御子産みたまひつ」とあることから、当時の人の語感では、この「おぼし」は<情交する>であって、となると、この「あはれにのみ」は実際に<ああ可愛い>とばかりの声を連発しての性戯の色濃さを言っているように見え、さぞ当時の女房たちは下半身を痺れさせながら読んだ事だろうと思わせる春本部分だが、この情緒の言い換えは至難だ。そも、「語らふ」だけで情交場面だと示されていたか。

#### [第六段 大君、男御子を出産]

\*年ごろありて(その院の深いご寵愛の賜物として計算どおりに十月十日後の翌年の冬に)、また男御子産みたまひつ(御息所は更に男の御子をお産みなさいました)。 \*「年ごろありて」は注に<『完訳』は「年立では五年経過」と注す。>とある。が、『完訳』の読み方は誤解だ、と私は思う。与謝野訳文には此処の文を<次の年には>としてあり、私も同意したい。確かに、「としごろ」は<年来、長年、この数年>という副詞語用が多いようだが、此処では「ころありて」が<計算が合って>を意味し、「とし」は<季間=期間=所定時間>を表わした洒落語用、かと思う。何に洒落ているのかと言え、上文の「うち語らひたまひて、あはれにのみ思しまさる」が艶笑譚なので、その衰えない院の御盛ん振りを目出度がる含み笑い口調のままに「年ごろありて」を<その院の熱意の甲斐あって>と<ちょうどその十月十日後に>を掛けている、のだろう。ただ、院の胤付けが何時だったのかは明示が無いので、その十月十日後になるであろう姉姫の男子出産が、次女姫の入内の翌年、とは即ち、女宮との年子、かどうかは分からない。が、間延びしない読み方で順を追えば、姉姫の女宮出産が四月で再参院が六月初めくらいとして、妹姫の入内は早くて秋だろうし、「さるべき折」(五段)とは縁戚関係での改まった挨拶と言え、年賀に思えるので、それも過ぎた次女姫入内の翌春あたりが、院の胤付け時期かと推量される。となると、その十月月後は同年冬あたりとなり、次女入内の、そして女宮出産の<翌冬>に見做せる、とは思う。勿論、是はいくつかある可能性の一つでしかないが、一つの形を仮想しないでは話を読み進めないし、私の見立てでは<数年後>よりは<翌冬>の方が辻褄が合い易いので、この時点では一応左様に踏んで置く。即ち、今現在で、男宮1歳、女宮2歳、御息所21歳、冷泉院49歳、玉鬘殿53歳、なのだが、以下の話は出産直後の祝い場面ではなくて、其処からは一段落した後の、その翌年以降の男宮の生長ぶりを見た上での冷泉院の様子や、更に時を経ての周辺事情の事柄に進んでいる語り口聞こえる。

そこらさぶらひたまふ御方々に(大勢いらっしゃる冷泉院の御部屋様方に)、かかることなく年ごろになりけるを(男宮の儲けは無くて長年が過ぎていたので)、おろかならざりける御宿世など(藤姫は院とよほど深い御因縁なのだ)、世人おどろく(当時の人は驚きます)。

\*帝は、まして限りなくめづらしと(冷泉院はましてこの上なく有難いと)、この今宮をば思ひきこえたまへり(この新生の男宮を思い申しなさいます)。 \*「みかど」は注に<冷泉院。院の帝、の意。

今上帝は内裏(うち)と呼称している。>とある。そういうものとして読む他はなく、特に此处では「おりみたまはぬ世ならましかば」に繋げる語用ではあるのだろうが、こういう自在性は確かに現代語文には無い。

おりみたまはぬ世ならましかば(在世中の親王誕生であったなら)、「いかにかひあらまし(どんなに心強かったことだろう)。今は何ごとも栄なき世を(今ではとても世継ぎが適わぬ立場なのが)、いと口惜し(実に残念だ)」となむ思しける(とお思いになったのです)。

女一の宮を(冷泉院は女一の宮を)、限りなきものに思ひきこえたまひしを(この上なく大事に思い申しいらっしゃったが)、かくさまざまにうつくしくて(このようにそれぞれ可愛らしく)、数添ひたまへれば(子供の数が増えなざると)、めづらかなる方にて(男御子が珍しさに於いて)、いとことにおぼいたるをなむ(とても格別に思っていたらっしゃるのを)、女御も(女一の宮の母君の女御も)、「あまりかうてはものしからむ(院があまりに男宮ばかりを最上なさせて御息所のところに入り浸っていたらっしゃるのは差し障りになる)」と、御心動きける(と御心が騒ぎます)。

ことにふれて(事ある毎に)、やすからずくねくねしきこと出で来などして(意地悪な嫌がらせなども出て来たりして)、おのづから御仲も隔たるべかめり(次第に女御と御息所の御仲も悪くなったようです)。世のこととして(世間の常として)、数ならぬ人の仲らひにも(身分の低い家の妻の序列でも)、もとよりことわりえたる方にこそ(初めから正妻の地位を得た方に)、あいなきおほよその人も(関係者以外の多くの人)、心を寄するわざなめれば(正当性を認めるものなので)、院のうちの上下の人びと(院内家政に従事する上から下までの使用人は)、いとやむごとなくて(非常に家柄が良く)、久しくなりたまへる御方にのみことわりて(長年仕えていらっしゃる女御の方にばかり肩を持って)、はかないことにも(ちょっとした行き違いでも)、この方ざまを良からず取りなしなどするを(御息所方側を良くないように言い立てるのを)、御兄の君たちも(おおんせうとのきみたちも、御息所の兄君たちも)、

「さればよ(言った通りだ)。悪しうやは(あしうやは、間違った事を)聞こえおきける(申しおりましたでしょうか)」と、いとど申したまふ(とますます玉鬘殿をお責め申しなさいます)。

心やすからず(心穏やかでなく)、聞き苦しきままに(自分ばかりか娘まで妻同士で反目しあう立場になる事を、辛い思いで聞いては)、

「かからで(こんな苦労も無く)、のどやかにめやすくて世を過ぐす人も多かめりかし(ゆつたりと穏やかに結婚生活を過ぐす人も多いだろうに)。限りなき幸ひなくて(最上位に就く恵まれた立場でなければ)、宮仕への筋は(王家への縁談は)、思ひ寄るまじきわざなりけり(考えるべきではないのだろう)」

と、\*大上は嘆きたまふ(と若宮の祖母上である玉鬘殿は嘆きなさいます)。 \*「大上(おほうへ)」は注に<玉鬘。大君に男御子が誕生したことにより呼称が「大上」となる。>とある。

## [第七段 求婚者たちのその後]

「\*聞こえし人びとの(かつて姫に求婚申した男たちは)、めやすくなり上りつつ(順調に出世して)、\*さてもおはせましに(姫の婿殿になっていらっしやっても)、かたはならぬぞ\*あまたあるや(不足の無い人は大勢いるんじゃないか)。」 \*「聞こえし人びとの」は注に<薫や蔵人少将ら、かつての求婚者。>とある。で、この文は結びに「言ひおはさうず」とあって、上文の玉鬘邸に於ける「御兄の君たち」と玉鬘殿との話し合いの場の、その場面のまま、姫の参院前に婿候補に挙がった者たちの近況などを話題にした、という悪御達の語りらしいので、その設定に留意して読み進む。と、この文も発言文括弧で括る校訂になりそうに見える。更に、以下の文も小さめに括弧校訂すると、生き生きとした兄弟の会話場面になりそうに見えて来る。で、そうしてみる。 \*「さてもおはせましに」は<そうになっていらっしやったら>で、「さても」は「聞こえし」を受けてく姫との結婚>の意味らしい。注には<『集成』は「婿君になっていらしたとしても」。「まし」反実仮想の助動詞。>とある。 \*「あまたあるや」の「や」は反語ではなく疑問形の感嘆詞なのだろう。

「その中に、源侍従とて、いと若う、\*ひはづなりと見しは(その中で源侍従とってとても若くひ弱そうに見えた者は)、\*宰相の中将にて(今や宰相中將になって)、匂ふや、薫るやと、聞きにくくめで騒がるなる(匂うや薫るやと煩いほど持てはやされている)」、 \*「ひはづ」は<ひ弱、華奢>。「ひは」が<とても柔なさま>で、「づ」は<ヤツ、者>の意の接尾語、らしい。 \*「宰相の中將にて」は注目発言だ。匂兵部卿卷二章五段に「十九になりたまふ年、三位の宰相にて、なほ中將も離れず」と薫君の記事があり、この時点で、この帖に於いて此处まで源侍従君と語られて来た薫君が19歳以上である事が明示されたことになる。しかも、この兄君の発言口調からして、薫君が侍従中將から宰相中將になったのが最近のことらしい話題の取り上げ方のように聞こえて、だとすれば、物語上の今現在は薫君が19歳か20歳くらいの年、ということになる。私の見方では、薫君は玉鬘殿の次女と同年齢であり、次女は長女御息所の1歳下なので、先に御息所の男宮出産を御息所21歳の冬と見たのと、ほぼ符合する。ただ、今現在はお目出度気分ではなく、御息所と女御との反目を憂う話題となっていて、出産直後からは少なくとも半年から一年くらいは経っていきそうな雰囲気なので、ざっと薫君21歳、次女尚侍21歳、長女御息所22歳、玉鬘殿54歳、冷泉院50歳、また左近中將31歳、右中弁30歳、と見て置く。

「げに(確かにかの者は)、いと人柄重りかに心にくきを(とても人柄が落ち着いていて卒が無いので)、やむごとなき親王たち(尊い王家筋や)、大臣の(おとどの、大臣家の)、御女を(おおんむすめを、ご息女を)、心ざしありてのたまふなるなども(結婚させようとして仰っているらしいのも)、聞き入れずなどあるにつけて(聞き入れないでいるように聞くにつけても)、そのかみは(あの当時は)、若う心もとなきやうなりしかど(若くて頼りないようだったが)、めやすくねびまさりぬべかめり(立派に成長したようだ)」など、言ひおはさうず(などと兄君たちは話し合っいらっしやいます)。

「\*少将なりしも、三位中將とか言ひて、おぼえあり(少将だった人も三位中將とか言って評判が良い)。容貌さへ、あらまほしかりきや(格好だって、以前から良かったですよ)」など、なま心悪ろき仕うまつり人は(などと玉鬘殿の判断を今更に非難するような心無い女房などは)、うち忍びつつ(陰口を利いて)、 \*「少将なりし」は蔵人君だろうが、「三位中將(さんみのちゅうじゃう)」に出世したらしい。が、上に薫君も三位中將である事が述べられている。普通は近衛中將は従四位下が官位相当らしく、三位という高い身分での兼務なら珍しいので人物特定が出来易そうだが、二人共では区別が付かない。また、どちらも源氏で、実に紛らわしい。三条宮腹は薫君という通り名があるので、この三条殿腹の方を「三位中將」と当面は呼

ぶらしい。また、この人は未だに年齢が分からない。人物像がとても掴み難い配役だ。

「うるさげなる御ありさまよりは(面倒な宮仕えよりは、余程増しかも)」など言ふもありて(などと言う者まで居て)、\*いとほしうぞ見えし(情けないことです)。 \*「いとほしうぞ見えし」は注にく玉鬘の様子。『首書或抄』は「草子地也」と指摘。>とある。が、いくら出来の悪い悪御達でも主人筋に敬語が無い、というのは如何なのだろう。此处は語り手女房が同僚を<情けなく見た>と取って置きたい。

この中將は(この三位中將は)、なほ思ひそめし心絶えず(今も姫に思い初めた気持が消えず)、憂くもつらくも思ひつつ(沈んだ傷心のまま)、\*左大臣の御女を得たれど(左大臣のご息女を得たが)、をさをさ心もとめず(全く興味を向けず)、「\*道の果てなる常陸帯の」と(「道の果てなる」と恋路を求める古歌を)、手習にも言種にもするは(手習いに書いたり口ずさんだりするの)、\*いかに思ふやうのあるにかありけむ(今さらどういう心算だったんでしょう)。 \*「さだいじんのおおんむすめ」は注にくこの左大臣は系図不詳。竹河左大臣。夕霧右大臣の上位者。>とある。系図不詳とあるが、可能性から推察すれば藤原右家筋の長老としか思えない。つぶさに読み返せば何処かに足跡の一端くらいは有りそうだが、今は流す。ただ、「竹河左大臣」などと特定視を試みるかの注記があるので、専門家によって既にある程度の人物像が研究検討されているのか、何処かでまた語られる事があるのか、少し留意して置きたい。 \*「道の果てなる常陸帯の」は注にく三位中將の詞。『源氏積』は「東路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりもあひ見てしがな」(古今六帖五、帯)を指摘。>とある。「東路の道の果てなる」は「常陸」を言う枕詞。であると共に、「道の果て」は<恋路の結末>であり<遠く離れて会えない人への思い>でもある。「ひたちおび」は<昔、正月14日、常陸国鹿島神社の祭礼で行われた結婚を占う神事。意中の人の名を帯に書いて神前に供え、神主がそれを結び合わせて占った。神功皇后による腹帯の献納が起源とされる。帯占。鹿島の帯。《季 新年》>と大辞泉にある。この結婚が初春のことだった、とまでは読めないか。ともあれ、「おびのかこと」は「帯のカコ(鉸具、留め金)」に掛詞した「帯の託言(帯占い)」であり、「常陸帯のかごとばかりも」は<神に願ってでも→どうしても>で、「あひ見てしがな」は<会ってみたい→結婚したい>と、平たく言えば<この恋は絶対実らせたい>で済む話を洒落込んで言い回したもので、遊び気分がたっぷりの風情で切実さはない。 \*「いかに思ふやうのあるにか」は反語表現で<いまさら如何考えようがあるのか、もう考える余地は無い=無駄なこと>。「ありけむ」は<あったのだから>。「無駄なことだったのだから」は男の理屈っぽい言い方で、女房言葉なら<何を考えていたのやら>という呆れ文句だ、多分。

御息所(姉君の御息所は)、やすげなき世のむつかしさに(心が休まらない結婚生活に疲れて)、里がちになりたまひにけり(実家に住まいがちになりなさってしまいました)。\*尚侍の君(玉鬘殿は)、思ひしやうにはあらぬ御ありさまを(考えていたような穏やかな暮らしぶりではない御息所の御現状を)、口惜しと思す(残念にお思いになります)。内裏の君は(参内なさった妹君は)、なかなか今めかしう心やすげにもてなして(却って華やかに気楽に振舞って)、世にもゆゑあり、心にくきおぼえにて(世間からも教養があつて卒が無いと評判高く)、さぶらひたまふ(宮仕えなさっています)。 \*「尚侍の君(かんのきみ)」は注にく玉鬘。『集成』は「「尚侍の君」と呼ぶのは、次に、現在の尚侍である中の君を「内裏の君」と呼ぶからであろう」と注す。>とある。が、玉鬘は「前の尚侍の君(さきのかんのきみ)」であり、この物語上での周知度からして「かんのきみ」と玉鬘を言い表す事が便利な場面は、私には分からない語感だが、作者と当時の読者間にはあつたにせよ、直ぐ下に現職の尚侍である妹君に言及するこの場面では、注意して正しく「前の尚侍の君」とすべきものに思える。また、一章三段に「尚侍の殿(かんのとの)」という語用があり、それ以降は私は是を<玉鬘殿>と言い換えて便利に呼称しているが、此处でも「尚侍の殿」は一法かと思う。が、そも玉鬘を「かんのきみ」と此处まで言い回すことに私はずっと馴染めないが、恐らくは玉鬘に比定される実存人物

が宮廷内で実際に呼ばれ認識されていた呼称という実相があった、と思えてならない。例えば真木柱巻四章二段に明け方に御所に帰った男踏歌一行が、当時玉鬘が住んでいた承香殿東表で浮かれ騒いだという実に印象的な記事があつて、当時の貴公子たちが今は政府の重鎮に収まっている、とかいう事情はありそうだ。でなければ、玉鬘は<故大臣の北の方>なんだし、桐壺帝代の右大臣の邸までは引き継いではないとしても、太政大臣にまで上り詰めただけだから其相応の邸を構えていた筈で、その条坊名で殿を呼んでも良さそうだし、ともかく「かんのきみ」以外の呼び方はいくらでもある、かと思う。